られたのがうれしかった。しかし、私達はまだまだこれからだ、もっと、もっと・・・。（文中敬称略）

（77年9月20日発行機関誌「くろゆり」第3号に収録）

解説　冬山合宿では初めてのバリエーションと縦走の取組みだったが、周到な準備と若さで成功させた。パーティーの平均年齢は、毛利さんを入れても何と！30・4歳だった。それ故、転落、歩行中のアイゼン紛失、荷上げ位置不明など、初歩的なミスもあった。

第5期冬山合宿

甲斐駒ケ岳

2966m

後藤　隆徳

●釜無川～横岳峠～鋸岳～甲斐駒ケ岳～駒ケ岳神社

▽77年12月30日～78年1月2日

▽CL後藤隆徳（30）SL杉澤康秀（28）記録毛利哲也（44）医療大橋　孝（20）

『とりくみ』

1、77年8月22日～23日に後藤隆徳、大橋　孝は角兵衛沢より黒戸尾根を偵察する。

2、77年10月7日～8日に後藤隆徳、今井芳明は釜無川より横岳峠をへて2670m峰まで荷上げを行う。

3、77年10月8日～10日に杉澤康秀、毛利哲也、今井芳明、杉山達は角兵衛沢より黒戸尾根の偵察と荷上げを行う。（山口　清が荷上げに参加出来なくなったため今井が連続参加した）

4、77年12月30日に桂田昌徳は釜無川林道終点まで車でサポートした。

12月30日（晴）

＜タイム＞下土狩7：00～釜無川林道終点11：15～出発12：55－保勝小屋14：00（泊）

6時半下土狩駅に向かうとすでにサポートの桂田が待っていた。

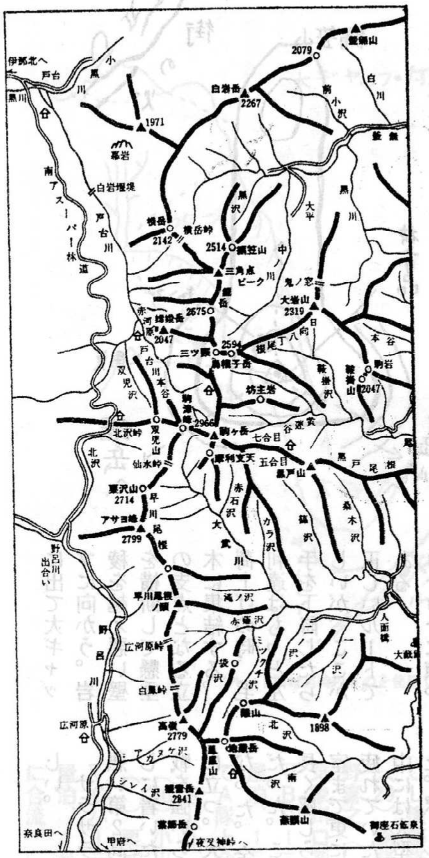
「何をしている？」と尋ねると「皆を待っているんだよ」と答える。「毛利さんは三島から歩いてくるのかなぁ！」などと言っている。どこかで連絡ミスがあったようだ。すぐに三島駅に迎えに行ってもらう。やがて杉澤が現れ、大橋も御殿場線で降りた。そして出発。見送りは杉澤好子のみ。天候はマアマアだ。桂田のバイオレットは246号線を通り籠坂峠を越え、山中湖を通過して御坂峠にかかる。料金所で「下のほうで事故があったので注意して下さい」と伝言がある。しばらく行くと、6台がメチャメチャになっていた。下り坂の急カーブが凍結してた為らしい。車は20号線に出て釜無川に向かう。左手に鋸岳の稜線が続く。釜無川の林道は、秋よりひどく荒れていた。途中で野生の猿の群れを見る。終点の中ノ川出合に着く。全ての荷物を降ろすと桂田は手を振って帰っていった。腹ごしらえをして出発しようとした時、大橋が「アッ」と言った。またやってしまったのだ。テントのポールが無いのである。大橋の話では下土狩の駅では確かに有ったとのこと。きっとトランクの中にあるのだろう。今山行は、ポールが無いと少し困る。桂田がチェーンをはずしてトランクに入れる時気がつき、戻って来てくれるだろうか？いろいろ考えた末、今日の行程は時間の余裕があるので、出発を1時間程遅らせて杉澤と大橋で車を追ったが良い結果は得られなかった。（後で分かったが、やはり桂田はチェーンをトランクに入れる時ポールに気が付いたそうだ。しかし、またチェーンを付け直し戻る気にもなれず、またポールは不要なものと判断したそうだ。）とにかく我がパーティーは今年もまたポールなしのテントを持っていくことになった。小1時間釜無川をつめると保勝会の小屋に到着。大橋持参のオールドで軽く前途を祝い早々と休む。冬山としては大変暖かく明日の天気が心配だった。

12月31日（雨）

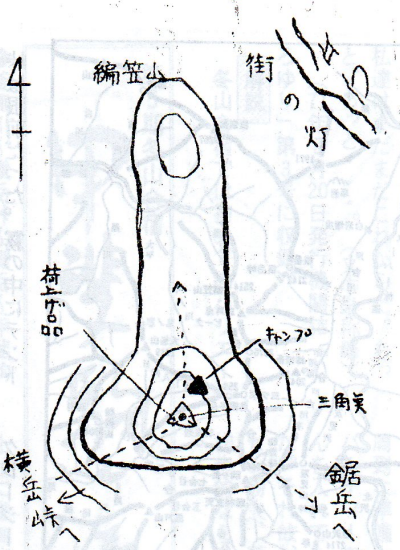
＜タイム＞起床3：30～出発5：00－小屋戻る5：20－再出発11：10－横岳峠12：40－3角点ピーク（2607m）15：30－テントサイト16：00（泊）

この釜無川上流の保勝小屋は屋根と壁はトタン張り、骨組みは唐松の丸太でできた簡単なものであった。以前は立派な建物だっただろうか、回りには大きな丸太などの残骸が残っていた。大きさは4人が横になれば一杯になってしまう。ただ入口の所が土間になっているので焚き火などはできる。夜暖かいと思ったら、朝方より雨になった。トタン張りな

ので少量の雨でも良く分かる。大橋の所が雨漏りで大騒ぎした。
早々と起床し食事を済まし出発したが雨と霧がひどく実に不快。ヘッドランプも利かず道も良く分からないのでまた小屋に戻って来る。雨がやむまで焚き火をしながら待機する。リミットは12時と決めた。この間、大橋がタバコを辞めると宣言し皆に冷やかされる。雨も小降りになり、霧も上昇して回りの山も見えてきたので再出発する。横岳峠に向かうが釜無川上流には雪がなく、沢は前面凍結していた。道は沢筋を離れ樹林帯の急登になる。雨が気持ち悪い。樹林が伐採された所までくると横岳峠は眼前だった。霧の中にテントが一つ確認できた。しかし、実際峠に着くとテントは三つだった。その一つのテントの人に、今日の天気図を見せてもらう。日本海に低気圧が発生して、それに前線が伴い、東進していた。これでは当分雨は止まないだろう。私はどうするか皆の意見を聞いてみたが、結局進むことになった。しかし、途中で伐採小屋に逃げ込めれば逃げること、絶対無理をしないことの条件をつけた。
途中で雪も多くなったので、アイゼンを付ける。やがて、伐採小屋と同じ高さになったが小屋はとても遠く行き難かった。もう上に上に行く以外道はなかった。このクレージーな雨の中を・・・。いくぶん傾斜が緩くなると2607mに着いた。風雨がものすごく、止まっていると体温が急激に下がる。三角点にはテントが一張りあった。私が荷上げ品を取りに、杉澤がテント場を捜しに行く。荷上げ品は無事回収、テント場も良い所が見つかった。やがて、毛利、大橋も到着。先程のテントから青年が出てきたので話す。彼等もテントの中が水浸しで大変だそうだ。
我々もテントの設営にかかる。ポールが無いので木の枝を折って代用する。案外具合が良かった。全員テントに入り夕食にする。豚汁と年越そばをたべる。サントリーホワイトがうまくまたたく間に飲んでしまった。20時、天気図を取るも好天の兆しはなかった。全員濡れたシュラフで不快な夜を送る。紅白歌合戦が始まった。朝方、風が出て雨が止んだ。



1月1日（晴）
＜タイム＞起床2：00～出発5：00ー編笠山コル付近6：00ーテントサイト7：15ー角兵衞沢コル8：00ー第1高点8：40ー第2高点11：40ー中ノ川乗越12：10ー6合目石室15：00（泊）
雨ならば停滞だったが、月の光も少し見え、風も穏やかなのでともかく朝食にする。元旦なので、雑煮である。鶏肉と野菜が豊富でうまかった。今山行の特色は、食料担当が杉澤なので、バラエティーに富み、工夫されている。
天気もなんとかなのでヘッドランプをつけて出発。テントサイトの左に街の明かりが見えた。大橋が「里心つくなぁー」などといっている。私が先頭に立ち、一旦裏手の山に戻り主稜とおもわれる所を右手に下って行く。この時点で街の明かりは右手に見えた。けっこうラッセルが深く朝っぱらから苦労する。私は2回程ヘッドランプで回りを照らしルートを確かめた。これだけ立派な尾根なら間違いないと思った。しかし、45分程下ってから「アッ」と声を上げた。街の明かりが右手にみえるのはおかしいのではないかと思ったのだ。さっそく地図を広げる。やはりルートは間違っていた。私達は編笠山に向かっていたのであった。（図参照）ガックリきたが、ともかく頑張って登り返す。夜はすっかり



明けた。天気はやや回復し、雲が早く流れ青空が見えてきた。強い風の中、細く凍った岩稜を進むと角兵衛沢のコルに着いた。コルにはテントが1張あり登山者が2人いた。私達は一安心して行動食を食べた。そして第1高点目指してあえぎながら登る。次は小ギャップに向かう。雪が少なくて楽だった。寒さも厳しくなかった。懸垂下降で小ギャップに降りる。大橋が振られた。

ここから急な所を登り反対側に降り雪壁を横断して風穴に着いた。この辺りが一番悪い所と予想したが、それ程でなく安心した。稜線に出て大ギャップに向かう。岩稜を越え悪い壁を横断して懸垂の支点となる立木に集結する。荷上げの時、毛利達はもっと左手を下降したらしいが、ここが正しいルートである。

コチコチに凍った私のザイルと毛利のザイルを結んで大ギャップの下降を始める。この先も、荷上げ時に使ったルートは避け、右のルンゼを登る。途中の滝は荷物を背負っていると大変なので空身で登った。杉澤がトップでルート工作するが、うまくいかないので私が登る。ルンゼを登って、樹林帯に入り中央稜に出て第2高点に達する。その間、角兵衛沢で会った2人が風穴を経由して大ギャップルンゼに横断できた。私達は順番待ちでそれをノンビリ眺めていたが、突然そのうちの1人が「ワアッ」という大声を出して墜落した。しかし、すぐ動いたのでたいしたことはないらしい。

サラサラと雪が舞い降りてきた。悪い第2高点を下り、中ノ川乗越しに着いた。そして、かなりの苦戦を強いられながら熊の穴ピークに立つ。天気は完全に崩れ吹雪になった。全員いささか疲れ気味だった。ここから三ツ頭は非常に長く感じられた。そして、6合石室まで更に1時間程あった。全員疲れていたががんばった。石室の中には大型エスパースが1張あった。ポールがあれば外が良かったが隣に張る。荷上げ品も無事だった。夕食はうまい豚汁。食料が豊富なので米を食べなくても満腹になった。あとはプリンを作ったり（このプリンは最高にうまかった）サントリーホワイトを飲みながら労山の将来について大いに語る。いつか皆でヒマラヤの処女峰を登りたいとか、来年の冬山はどこなどだった。夜の天気図は取らなかった。明日はどんな天気でも出発する決意からだ。

1月2日（晴）

＜タイム＞起床1：40〜出発4：30ー甲斐駒ケ岳6：55〜7：15ー5合目10：15ー笹ノ平12：15ー白須バス停15：00〜三島

シュラフから出て換気穴から空を仰ぐと確かに星が光っている。皆を起こしてコンロを炊く。今朝はグンと気温も下がって気持ち良い。朝食はオジヤかなと思ったらまた豚汁だった。それでも野菜が大量に入っていて実にうまい。そんな事を皆でワイワイやっていると、隣のテントから「うるさいゾ」の声。しかし無視する。朝早起きをして迷惑がられたのは初めてだ。山の中だから黙っていたが、本来なら一発かましてやる所だ。出発準備も整いヘッドランプをつけて石室を後にする。天気は、風もなく穏やかだったが、仙丈岳にはすこしガスがかかっていた。初め穏やかな登りも次第に急になってくる。一ケ所夏道でない悪い岩溝を登る。毛利が「朝っぱらから汗をかいたナ」という。

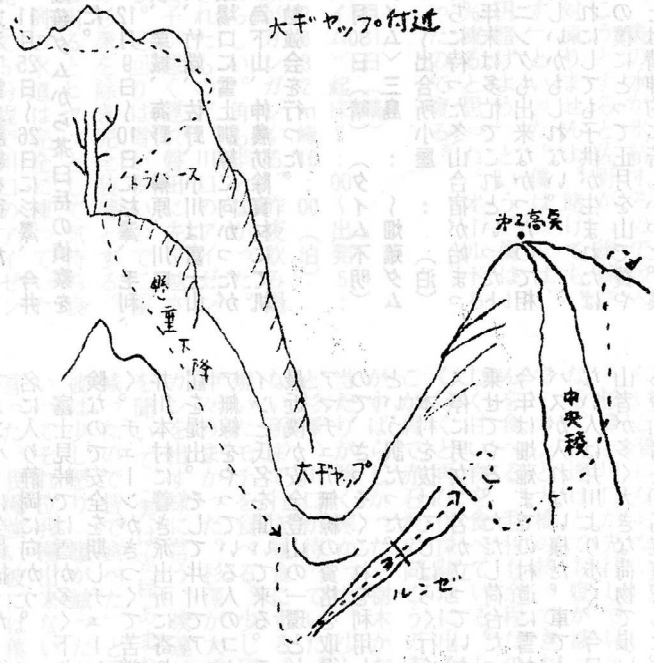
やがて鎖場に着いた。張ってあるのが鎖でなく針金なので滑って摑みにくく、登りにくい。しかも途中でハングしている。全員ハアハアして登りきる。ここを暗いうちに登るのが今日のポイントだった。

やがて道は細くなり悪いところは戸台側を巻くようになる。頂上直下のコルに昨夜ビバークした3

人がいた。彼らは一昨日、昨日と時々一緒になった人達だった。昨日は仙水峠の仲間の所まで行くといっていたがやはり無理だったのだろう。1人が出発の時、ザックを上げた瞬間「ギックリ腰」をやってしまった。大変だ。ルンゼ状を抜けると頂上だった。トップをゆく杉澤が頂上に立った時、ちょうど雲上に太陽が出てきた。そして大橋、毛利、私の順で頂上に立つ。長い道のりだった。そして私には冬山10シーズン目の記念すべき頂きだった。（文中敬称略）

（73年11月30日発行機関誌「くろゆり」第5号に収録）

解説 鋸岳から甲斐駒の縦走は会として大きな課題であった。なぜならばこれらの岩と雪のルートの経験が将来北アの冬山の基礎となるからである。しかし、実際は想像していた程でなかったことは、前年来、会の実力が着実に向上してきた証しといえた。



（ルート図は当時のものを使用しました）

第6期冬山合宿

聖岳東尾根

3011m

後藤　隆徳

●聖岳東尾根～聖岳～上河内岳～茶臼岳

▽78年12月30日～79年1月3日

▽Aパーティー＝12月30日出合所小屋泊、12月31日2632m泊、1月1日聖岳をへて聖平小屋にてB隊と合流。

CL後藤隆徳（31）SL杉澤康秀（29）総務毛利哲也（45）装備佐野喜之（　）医療大橋　孝（21）気象川口智也（　）

▽Bパーティ＝12月31日出合所小屋泊、1月1日聖沢をへて聖平にてA隊と合流。

SL山口　清（34）竹端節次（40）小川広太郎（　）坂牧洋子（　）栗城昭子（　）

▽Cパーティー＝1月1日横澤小屋泊、1月2日茶臼岳でA・B隊に合流。

SL今井芳明（　）海野良明（　）榊原由美子（　）

『とりくみ』

1、78年6月16日～18日に後藤、佐野、川口の3名は出合所小屋から東尾根をへて聖岳に登り、聖沢を下降して偵察を行った。

2、10月1日に後藤、川口は荷上げ品の買出しを行った。

3、10月7日～9日に杉澤、今井、大橋の3名は出合所小屋、2632m峰に荷上げした。

4、10月7日～9日に後藤、山口、佐野、榊原は出合所小屋、聖平小屋、茶臼小屋に荷上げした。

5、11月18日～19日に杉澤、今井、小川、栗城は富士山吉田大沢で雪上訓練を行った。

6、11月22日～23日に後藤、毛利、川口、榊原、海野、山口は富士山